
献 辞

内 山 加 奈 枝

(英文学専攻主任)

藤井洋子先生は、2001年に本学に助教授として着任されて以来、22年の長きにわたり教鞭をとられました。1973年に日本女子大学附属高等学校を卒業されると本学英文学科に進まれ、1981年に同大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期を修了、1989年にはアメリカ合衆国オレゴン大学言語学科修士課程を修了されました。米国留学以前には、4年間本学英文学科の助手を務められ、非常勤講師としての約10年間をあわせると、約35年もの長い年月、後輩の育成にご尽力くださいました。

教育面では3・4年次の卒業研究の指導はもとより、「英語学概論」、「言語コミュニケーション演習」といった英語学分野の主要科目を担当されました。なかでも教職課程に必須となる「英語科教育法」では、英語教員になるために必要な英語教育の歴史や教授法はもちろんのこと、日本の英語教育に必要な心構えを時には厳しく指導されました。藤井先生のゼミから大学院に進む学生も多く、数名は博士号取得にまで導き、次世代を担う研究者たちを世に送り出されました。

研究面のご業績では、日本英語学会、社会言語学会など、複数の学会で役職につかれ、日本内外の複数の学会誌の査読委員や編集委員を務められました。2020年には、社会言語学会徳川宗賢優秀賞を受賞され、日英語の語用論、談話分析、社会言語学、異文化コミュニケーション、英語教育など多方面で素晴らしいご業績をお持ちです。

先生の精力的な教育と研究活動に加えて、英文学科が記憶に残したいことは、本学英語教育改革時のご献身です。2021年、目白と西生田キャンパスの統合に先立っては、全学的な外国語教育改革という大役を、外国語教育分科会の長として担われました。キャンパス統合前、両キャンパスでは異なる外国語教育プログラムを学生に提供していました。統合にあたって、共通の英語教育プログラムを作成することは時に困難もありました。藤井先生はアクティヴ・ラーニングの必要性を重視され、新しい必須英語科目群を形成するまで骨身を削られました。新プログラムの実施後は、教育効果を検証され、学生の満足度が以前より高まったことが証明されました。

ひとりの後輩の記憶にある、藤井先生のお姿も記させていただきます。私が学部生のころ、先生は非常勤講師として教えていらしたはずです。先生の教えをうける機会を逸したことはまことに残念でした。ですが、2006年に私が専任講師として母校に着任した後、英文学科で一緒に過ごした長い月日を振り返れば、藤井先生から実に多くを学びました。女性同士、私的なこともよくお話をさせていただきましたが、お優しく、礼儀正しく、エネルギッシュなお人柄は変わりません。先生は学科会議・教授会であれ、委員会であれ、いつもご自身の意見を率直に述べられ、大学運営においても頼れる方でした。放送大学の客員教授もされていたことからもうかがえるように、先生のご発言は、まさに言語のエキスパートとして自信に満ちたものでした。

先生が本学附属校に通われた時を含めると、約半世紀、本学と共に歩まれたこととなります。当然のことながら、先生の母校愛は大変深く、教育と研究・社会活動、公務にあますところなく還元されたことがよくわかります。現在、少子化は進み、大学が要求される社会的役割も変貌する局面にありますが、私たちが歩んでいく道のりを今後もあたたかく見守ってくださると思い、邁進してまいります。英文学科を代表し、これまでの情

熱的なご指導に深い感謝の念を捧げると共に、藤井先生のご健康とさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2023年3月

